

平成2年6月24日(日) 14:00~16:00

越谷市郷土研究会 第98回 研究発表会 『絵馬について』の資料

絵馬の変遷



木製馬形(滋賀・兵主大社)

土製の馬の献上



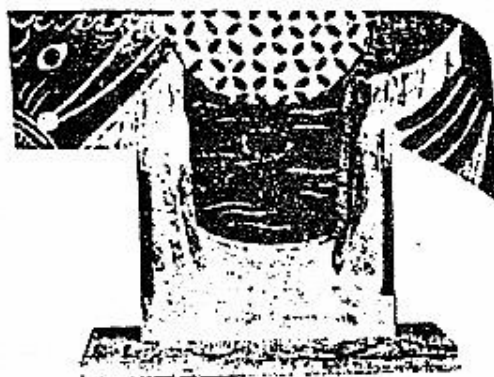
土馬（奈良・天香久山麓膳夫出土）

木製の馬の献上



木製馬形（滋賀・兵主大社）

板立て馬の献上



板立馬（奈良・手向山八幡神社）

当麻寺の絵馬（馬と馭者）



上部に左側の紐穴が見られる

秋篠寺の絵馬（馬と馭者）



上部に紐穴が二ヶ所見られる

絵馬の変遷

越谷市郷土研究会理事 加藤幸一

絵馬とは

① 絵馬とは・・・絵馬は庶民が願いをかなえようと神社（神様）や寺院（仏様）に奉納する時に使われる、絵が描かれた一枚の板です。絵柄は馬とは限らずいろいろな絵が見られます。絵馬には祈願者の姓名・年齢・性別などが記されています。願いがかなうと絵馬を二枚奉納して感謝する風習も見られます。今日でも、安産・家内安全・受験合格などの祈願のために盛んに使われています。

② 絵馬の分類・・・絵馬は小さな『小絵馬』（こえま）と大きな『大絵馬』（おおえま）とに分類されます。

小絵馬は古代から現代まで見られ、主に個人的な祈願に用いられて神社・仏閣に奉納されます。絵馬の形は上部を屋根のようにした五角形と、横長（よこなが）の長方形とがあります。屋根型五角形は関東に多く見られ、横長の長方形は関西では一般的です。

大絵馬は江戸時代から明治にかけて絵師によって盛んに作られ神社・仏閣に奉納され、額絵馬とも言われます。奉納意図はある事業や行為の成就を記念したり、単なる祝賀のためが一般的で、個人的祈願より数人の連名もしくは『組』や『講中』（こうじゅう）と記されたものが多い。また、第三者に見てもらうことにも意識して奉納するため、その製作には地元の絵師ときには江戸の著名な絵師に依頼することもある。美術的価値の高い作品が数多く残っています。図柄で多く見かけるのは、神話・伝説の一場面・武者絵・芝居絵・中国の故事・社寺の参詣などです。変わったものでは『算額』（和算家が自己の発見した数学の問題や解法を書いて神社などに奉納した絵馬）も見られる。

一般に、小絵馬は民間信仰的な絵馬で、民族的な資料となり、大絵馬は美術的に価値ある絵馬であることが多い。

③ 絵馬の起こり・・・絵馬は祈りです。神仏への手紙であるとも言えます。古代の人々は、この世の中のすべてのものに神が宿っているものと信じ、恐れていました。ふだんから何事にも神に祈り、神の助けを求めました。何事か起こったときは、神に祈るしか仕方がないのです。神に祈るときはいろいろなものをあげました。お祭りはその一つです。村全体の大きな願い事ときは朝鮮から渡って来た大切な動物である『馬』をあげたりしました。例えば、雨が降らず日照りが続いて作物が枯れそうになったときは生きた黒い馬をあげて雨が降るように祈りました。「雨乞い」です。また、逆に長雨きが続いて田畑の作物が腐ってしまうようなときには生きた白い馬（後には赤い馬）をあげました。村の大切な馬を奉納することは大変ですし、毎日のえさ代も大変ですから、後に生きた馬に代わって木や粘土で馬の形を作って奉納するようになりました。そしてついに一枚の板に馬の絵を描いて奉納するようになりました。これが『絵馬』の起こりであろうとされています。

絵馬の変遷

1. 神馬献上（しんばけんじょう）

馬は神の乗り物。雨乞いは黒い馬、日乞いは白馬（のちに赤い馬、文献上では平安中期）を神社に献上。黒は黒雲を連想し、白は白日を連想するからであろう。祭りにしばしば神馬の献上が行われ、たいていの大社には神馬が飼われているのは神馬献上の名残である。

2. 土製の馬の献上

奈良時代には生き馬に変わって土製の馬が献上されていたと考えられている。その裏付けとして、土製の馬つまり土馬が和銅銭と一緒に出土した例がある。土馬の出土は神社・古墳・井戸遺構・河川跡などである。古墳から出土する理由は古墳に神社が営まれていることが多いと言う。井戸遺構出土は井戸の祭祀に際して水の神に土馬を捧げたものと推定、河川跡出土は河川氾濫を抑えようと白馬を沈めたと推定されている。

3. 木製の馬の献上

平安時代になると木製の馬の献上はもう一般的となり、形もずっと大きく精巧でいろいろの装飾を施していたと考えられている。

4. 板立馬（いただてうま）の献上

文献上では平安時代の天曆2年（948）に木製馬形より更に簡略された板立馬の記事が見られる。板を馬形に裁断して彩色して立てるようにしたものである。

5. 絵馬の起こり

我が国最古の絵馬は、浜松の伊場遺跡で発見された奈良時代の絵馬である。文献で見る限り木製馬形の出現は平安期であろうが、地方では生き馬の献上の他に既に木製馬形の献上が見られ、奈良時代には板に描かれた馬つまり板絵の馬「絵馬」が使われていたとの考えもある。

6. 絵馬が寺院にも奉納

平安時代には絵馬がかなり広い範囲に普及していたと推測されている。そして平安末期には絵馬が神社だけでなく寺院にも奉納される。本地垂迹説が活発に唱えられ、神仏習合思想が強化されていたからと推定されている。

7. 中世の絵馬

奈良・平安時代の絵馬は伊場遺跡の例にみるように、正方形に近い長方形であるが、中世の絵巻物に現れている絵馬は上辺がゆるく丘形になったり、山形になったりしている。上部に穴があり、そこに紐を通して吊されるのは変わらない。また画題は馬だけの図の他に、馭者（ぎよしゃ）が二人伴う牽馬（けんば・馬を引くこと）の図も見られてくる。

なお、中世末期になると日照りと降雨が都合よく適切に恵まれるようにと、白毛の馬の絵馬と黒毛の馬の絵馬どを一对（いっつい）として奉納するようになる。

中世の現存する絵馬は奈良の当麻寺（たいまでら）の曼陀羅（まんだら）堂の天井裏から見つかったものと、奈良の秋篠寺（あきしのでら）の本堂の天井裏から見つかったものがある。

8. 室町末期の『転形期の絵馬』

室町末期になると、絵馬の画題も馬だけでなく、いろいろの物が現れてくる。形も横長の長方形だけでなく、上辺に丸みを帯びた物から、扇面形（せんめんけい）やさまざまな変わった形が出てくる。大きさも次第に大型化してくる。また漆絵・蒔絵（まきえ）のように技巧をほどこした絵馬も出現する。奉納の意味も大きく変化してくる。そこでこの時代の絵馬を『転形期の絵馬』と名付けている。

- ①画題の多様化・・・馬の絵以外のもの、例えば仏教に関係する図柄、風俗に関係する図柄が見られる。
- ②形状の多様化
- ③絵馬の大型化
- ④芸術性・・・芸術的性格を帯びてくる。
- ⑤祈願内容の多様化・・・雨乞い・日乞いの他にさまざまな個人的祈願が見られる。例えば、武士団やその棟梁の武運長久（ぶうんちょうきゅう）、庶民の村の氏神様に祈願する生活の安穏と生業の繁栄。

9. 江戸時代の絵馬

- ①大絵馬・・・豪華絢爛（ごうかけんらん）な安土桃山時代になると更に大型化し、豪華になる。そして、絵馬堂や拝殿（はいでん）に掲げられる額付きの絵馬つまり『大絵馬』が、江戸時代を通して日本各地に普及する。我が国最大の絵馬は、明暦3年（1657）、京都の清水寺（きよみずでら）に奉納された『田村暦（たむらまろ）夷賊（いぞく）退治（たいじ）之（の）図』（横六間〔けん〕、縦二間・一間は約1.8間）であると言われている。
- ②小絵馬・・・江戸時代中頃になると庶民の小絵馬の奉納が盛んとなり、絵馬を作り販売する『絵馬屋』や専門の『絵馬師』が活躍する。また絵馬を町中に売り歩くものもいた。絵馬の図柄の種類もとて多くなる。そして神社・仏閣や絵馬奉納のために作られた絵馬堂に盛んに祈願・奉納されたのである。絵馬の彩色は墨・胡粉（ごふん・貝殻を焼いて作った炭酸カルシウムの粉末の白色顔料）・黄土・丹（たん・鉛に硫黄と硝

石とを加えて焼いて作ったオレンジ色の顔料）・群青（ぐんじょう・青色の顔料）・緑青（ろくしょう・銅の錆びから作られる緑色の顔料）など概して安価な顔料が使われた。なお北陸地方には浄土真宗の盛んな地域であったため小絵馬がほとんど見られない。

千住（せんじゅ）の絵馬屋

吉田屋は江戸時代から八代も続く『絵馬屋』である。『千住絵馬』と呼ばれるようになった。東京でただ一軒だけ残っている絵馬屋で、足立区の千住四丁目の旧日光街道に面している。七代目吉田政造（まさぞう）氏の跡を娘である晁子（あさこ）氏が八代目を継いでいる。

千住絵馬の特徴は今でも手書きで描かれていることである。色付けは、泥絵の具（粘土などを顔料と混合した泥状の絵の具）をにかわ（動物の骨・皮・腸などを水で煮た液を乾かし固めた物質で、物を接着させるのに主に用いる）で溶かしたもの。一色塗るとその色が乾くまでは次の色のをせられないので大変時間と根気のいる仕事だという。

材料は板にも書くが主に経木（きょうぎ）に書く。これを『板絵馬』と区別して『経木絵馬』と呼ぶ。経木とはお経を書くのに使った木の薄片と言う意味から、木材を紙のように薄く広く削ったものを言う。魚や佃煮（つくだに）などを包むのに使われた。

越谷市に見られる絵馬

①第六天の算額（昭和50年5月2日 市指定 有形民族文化財）

市内下間久里（しもまくり）の第六天神社に掲げられていた。算額とは、和算（中国の古代算法の流れを受けて、我が国で発達した数学）家が、自分の発見した数学の定理や問題の解き方を書いて、神社や仏閣に奉納した絵馬である。第六天の算額は長い間風雨にさらされ、だいぶ痛んでいる。そのため何が書かれているかよくわからないが、山形大学にある算額の資料によって、どうにか読むことができるそうである。奉納は、文久（ぶんきゅう）2年（1862）である。

②谷中（やなか）観音堂の絵馬

図柄は、白馬が戦いで傷ついた鎧武者（よろいむしゃ）を背中に乗せて助け出すありさまを描いたもので、大絵馬である。この絵馬はいつ、誰が奉納したものか不明。昔からこの絵馬に祈願すると、神様がこの白馬に乗って助けにきてくれると信じられてきた。それでこの絵馬は谷中の守り神として大切にされてきたが、いつのころか、この白馬が逃げ出さないようにと、馬の手綱（たづな）を杭（くい）に結び付けた絵が書き加えられたと言われている。

③大泊（おおどまり）観音堂の熊谷直実（くまがいなおざね）挙扇図

この彩色の大絵馬は大泊の大龍山安国寺（あんこくじ）管理下の観音堂に掲げられており、同寺の末 福寿院慈眼寺（じげんじ）境内にある。東国、殊に武蔵野国においては武将が輩出しているので、武将の大絵馬が多いのである。

この熊谷直実挙扇（きょせん）図もその一つであるが、新編武蔵風土記稿によれば、安国寺は熊谷直実（蓮生坊・れんしょうぼう）の営んだ草庵で、立像の本尊阿弥陀如来は、蓮生坊の守り仏であった。

直実は寿永3年（1184）西海（さいかい）に走った平家を追って一の谷の平家居館に一番乗りして高名を立てた。この時、須磨浦（すまのうら）で平敦盛（たいらのあつもり）を扇を挙げて呼び戻し討ち取ったが、その首に遺品と書状を添えて敦盛の父経盛（つねもり）のもとへ送り、経盛は、熊谷状に対し感謝の返状を送った。

（越谷市郷土研究会幹事 谷岡隆夫氏の論文より抜粋）

◎越谷市内の神社・仏閣に掲げられている大絵馬（額絵馬）及び扁額についてはまだまだ把握されておらず詳細な調査が強く望まれる。

